

伊那谷地名研究会通信

第47号

発行日
発行所
事務所

平成二六年四月二五日
伊那谷地名研究会
〒399-1210
長野県下伊那郡下條村陽阜七二〇八

第12回シンポジウム

『下伊那の災害―地名は警告する―』

伊那谷地名研究会 会長 原 董

東日本大震災は、日本が地震の國であることを改めて強く認識させられた大災害です。あれから3年が経過した今、改めて地震災害への備えが、全国的に広まっています。

そして、飯田市美術博物館では、遠山地震を中心とする災害に焦点を当て調査をまとめ、東日本大震災3周年企画展「地震と地盤災害―そのとき何が起こるか―」をテーマに貴重な資料展示を行い、地震と防災を考える上で大事な企画展を開催しました。

伊那谷地名研究会では、美術博物館と共催により、地名から下伊那地域の災害を掘りおこし、「過去に学び・今を知り・後世に繋ぐ」を目標に、3月21日、飯田市美術博物館において、第12回シンポジウムを開催しました。当日は県外から参加の方など、80名を越える皆さんの参加をいただき、内容あるシンポジウム開催に繋がりました。

下伊那地域の災害を縊きますと、地震や天龍川による多くの災害の歴史がぎざまざっています。しかし、いつの時代でも、災害の発生から数年は語り伝え覚えていられるのであろうが、時間が過ぎ人びとが変わって行くと、災害の歴史や恐ろしさが忘れられて行く現実があります。そのために、災害に対する人びとの日常の備えとして伝えられてきた言葉が、「災害は忘れたころにやってくる」、です。災害地名は、災害の恐ろしさを後世に伝える歴史として、人びとが忘れないように、土地に刻んだ「災害の警告」であり、地名から災害の実際を知る大切な資料です。

その一例を示すと、「梅」「柿」「欠」「掛」「崩」「落」「猿」「嵐(ぞれ)」等は、災害により崩落した地形を伝え、「釜」は崩落による浸食の穴、「押出」は土砂が押し出された地形、「蛇抜」は大雨で崩れた地形を伝える地名で、このほか「胡桃」「和田」「山吹」「出砂」等ありますが、何れも音による地名の漢字表記です。

今回発表をいただいた地名から、下伊那地域の災害を縊き、地域や人びとは災害とどう向き合ってきたか。災害と人びとの生活は切り離せない現実を、地名を通して学び、災害への備えを共通のものとして伝えたいものです。(写真 全体討議の場面)



第12回シンポジウム

『下伊那の災害・地名は警告する。』

去る3月21日に飯田市美術博物館講堂で開催されました第12回シンポジウム『下伊那の災害―地名は警告する―』での発表内容を、各発表者が当会報のために、改めてまとめて頂いたものであります。当日は、東京や岐阜県、東信の御代田町・千曲市・伊那市・駒ヶ根市等から、また、消防関係の方などを含めて、85名余の参加を頂戴して、名実ともに、盛会にして充実したシンポジウムとなりました。

災害と地名

久保田賀津男



災害には、風水害（土石流・洪水・山地崩壊・地滑りなどが付随する）や地震、落雷、旱魃、火災、冷害、

凍結、低温による害、雨水害などがある。

このような自然災害に加えて、近年では家屋の密集化や土地のコンクリート化が進み、都市型災害と呼ばれるものも増えている。

三六災害以後、悉くの河川がコンクリート水路化され、雨水は一気に天龍川へ集中するようになった。道路の舗装、農地の減反や宅地化などが、雨水の浸透を減少させている現状は、伊那谷に都市型災害が広がりつつある事を示している。

しかし、そこに家屋や農地、植林地など人の生活に関わる人為的な空間が存在しなければ災害に該当しない。つまり災害とは、人間の側からの一方的な解釈によるもので、これは災害を考える上での大前提になる。したがって開発が山の奥へと進めば災害の範囲は広がり、複雑化していく。

災害に対して人々は防風林や堤防などによる防災策を講じるとともに、被災の記録を永続的に周知させる工夫、例えば水害の記録を石碑に刻んで残すような事を行ってきた。

災害地名には、このような防災的な目的でつけられたものと、災害後につけられたもの二種類があると思われる。

三六災害で大崩壊をした大西山の大崩壊壁は、それ以前から雨が降るたびに崩れるといわれ「雨ナギ」と呼ばれていた。そこには「降水時には特に注意をせよ」という意味がこめられているように思われる。

天正13年（一五八六）に起きた天正地震では、平谷川右岸が崩壊して川を堰き止め、地震ダムができた。ダムは決壊して下流に被害を及ぼすが、以後、ここには「海」の地名がついた。

同様に享保の遠山地震では、「出山」「夜川瀬」などの地名が生まれている。これらは災害後に生じた地名の典型といえる。

三遠南信道がルートを延ばし、リニアは二つの大山脈を貫通する予定でいる。自然に加わる行為が大きくなるほど、災害規模も増大し、予想できないような被害に発展する可能性が大きい。



大鹿村大河原 大西山の崩壊

福島原発事故のように、現代の災害は多くの要因が複雑に絡み合って地球規模に被害を拡大させている。私達が災害避難民となって故郷を追われる事は十分予見できる状況にある。

このような現実の中で、災害に対処するべく人々が生み出した知恵の一つといえる災害地名の表記が変えられ、その意味が忘れられ、あるいは地名そのものが消えていく事を、もっと多くの人が真剣に「怖い」と思わなければならぬ。

（飯田市鼎切石）

天龍川周辺の災害地名

今村 理則

災害地名の難しさ



災害地名を考えようとした時に、まず悩むのは地形地名ではないだろうか、ということである。

小字を中心にみて

いくのであるが、単なる地形地名なのか、それとも災害があったことがその地域に記憶されていたのかどうか、はつきりしないことがある。そんな場合には、災害地名にいらしてしまえばいいではないか、というのも一つの方法である。しかし、それでも地形地名の可能性が有ることだけは明示しておく必要がある。

伊豆木や飯沼・富田にあるケダシ小字や上虎岩にあるミダレバヤシ小字がそれである。

災害小字の数は多い

もう一つ、災害地名が難しいのは災害にかかわりそうな小字名の数が多いことである。

「天龍川周辺の災害地名」という題名にすれば、採り上げ可能な小字は十分にあるだろうと思っただのであるが、数が多すぎて、どれを採り上げていいのか、かえって迷う結果になってしまった。結局、下久堅の小字を中心に考えていくことにした。川縁にも山地にもまたがっている土地だったからである。

「浸水小字」もある

災害地名には、水に漬かったことのある土地の記憶を留めている小字がある。

下虎岩にホタヒタ小字がある。「土手まで水が漬かりやすい土地」をいうのであろう。天龍河畔にある。

知久平にもゴミダ小字がある。「水の漬かりやすい地(田)」のことか。これも天隆川氾濫原にある。川路にもコンスジマ小字がある。現在の嶋地区にある。近くにはキツネジマ小字があるが、クンスジマは狐には関係がないだろう。以上は、いずれも二、五万分の一の全国地図には載っていないので、伊那谷南部の特徴的な小字の可能性もある。

「メナフリ」小字は特徴的

メナブリやメナフリという小字が上虎岩の神明大神宮のまわりには多い。これも全国地図にはないので、珍しい地名である。

メナはマナゴ(真砂)で、フリはフル(振)が名詞化した語で、「砂地で揺れ動いて崩れた所」を意味するのであろうか。地震によるものと考えられる。黒田にはフルイダ小字がある。

「チャウキ」も災害地名か

上虎岩の相原稻荷神社の近くにある。チャウはツブ(潰)の変化した語で、キルサキ。従って、チャウキは「崩崖のある側稜の先端部」をいうのであろうか。これも全国地図にはない伊那谷南部の特徴的な小字かもしれない。

(飯田市嶋)

遠山地域の災害地名

針間 道夫

平成一七年一〇月一日に、遠山地域は飯田市に吸収合併し、面積は市全体(六五八、七六キロ平米)の半分以上(三三三、四一キロ平米)を占める広い面積の中で、今までに多くの災害が記録されている。が、災害地名はその割に少ない感じがする。今回出来るだけ関連地名を拾ってみる。

遠山谷の真中を中央構造線が通っている。それに沿うように赤石構造線をはじめ各種の地層もあり、両側からの圧力によって斜めや縦に形成されていて、剥がれ易いというか深層崩壊の危険に晒されている。地質については、専門の先生方にお任せ(昭和51年刊行『村史』遠山の地質編を執筆された松島信幸先生・遠江地震に起因する遠山地変の埋没林に年代測定に尽力された寺岡義治先生、更には遠山の地に何回も足を運ばれて、遠山地震の研究の坂本正夫先生。遠山地区で防災の指導をされている美術博物館の村松武学芸員)して、今回、出来るだけ関連地名を拾ってみよう。

遠山の人は、自然は自然のままに、災害を恐れながらも受け入れてきた感じがする。山に木があり、川に石があつて当たり前、自然として構わないでそのままにしてきた経過が見える。明治以降、外部の目先の利く資本によって山の木は切られ、高度経済成長期には重機によって河原の石が運び出され、近年は岩ヒバ、ウチヨ

ウラン、シダの類の植物、蝶の卵等、地元の人々があつて当たり前とそのままにしてきた動植物が持ち去られるケースが見られる。伐採された山肌は、豪雨にさらされると一気に土砂を押し流して濁流となつて氾濫を起こした。遠山の歴史は災害の歴史でもある。

遠江地震と遠山地変の関連伝承

和同七年（六一四）に起こつた遠江地震に起因する遠山地変と言われる池口地区の日蔭山の大規模な崩壊により、池口川、遠山川を塞ぎ止めての埋没林を作つた災害湖の出現、溜まつた水は今のカマスクボ辺りで東側に流れ出たので今の地形、もう数メートル高くなつて西側に流れ出すと全く状況は変わつていたと推測される。災害湖がどのくらいの期間にわたつて水を湛えていたかは専門の先生方にお任せして、湖を江と字をあてた江儀山、池原の地名が、水が流れ出た池口の名で総称されるようになっていて、その時に島と呼ばれる川に面した七つの地名が出現したと伝えられているが、大島西島、漆平島、上の嶋、尾の島、松島、月の島と推測される。

CS立体図は地表の情報が多方面に詳しく得られる地図であるが、蛇抜け沢などの様子、更には、地変の時に動いて乗つたままの不安定な地層があり、何時大規模な深層崩壊が起きるかもしれない危険な状況と言う。

遠山地震による地名の出現

享保三年（一七一八年）、遠山地震と呼ばれる和田の中心にそびえる盛平山の西側が崩落した災害では出山が出現し、数名の人命が犠牲

になつたと記録されている。今でも地元の人々は地震山と言う。その北寄りには地震ナギの地名が今でも残り、地形的に山が崩落した様子の分かるオチ「越」、遠山川対岸の「押出」崩落の後、沢筋の扇状地を形成、昭和二八年の災害では、沢が氾濫して二名の消防団員が殉職している。出山の出現による遠山川の流れの変化が地形、地名が関係するが、一夜にして出現したとされる「夜川瀬」については、諸説ある中なので今後の検討材料とさせて頂く。

河川の災害の関連「島」の地名

遠山の地には「島」のつく地名が多くあり、上村には、西ノ島、奥の島、上島、新（あたら）島、筆（ひつ）島、南信濃には柿の島、上島、阿島、大島、西島、漆平島、上の嶋、尾の島、松島、月の島、島古、飯島とある。

植物や果実に例えられる災害地名

欠けに繋がる柿の島、柿平、埋まりに繋がる梅平、梅のクボ、なし崩しにもろい地層を現す梨元、更に栗下、下栗、桜久保、胡桃久保、梶谷等があげられる。遠山谷の多くの集落は、崩落した緩斜面や低いながらも河岸段丘の上にある、尾棚「おだな」高平「たかつたいら」山原「やまはら」、とつばら「十原」も山が崩落した跡地に集落が形成されている。

遠山地域の近代の災害

明治以降の記録では、明治一八年、八日市場での崩落により部落埋没の人命被害。昭和一二年本谷川（遠山川）の湯ノ沢奥山土なぎの崩落で川を堰き止めてダム湖が出来、須澤集落の田

畑、人家の被害多し特に宇佐八幡社が被害を受け、神社を移転して霜月祭りを伝承してきたが、平成一〇年の須澤の地すべりで多くの人家の移転を余儀なくされ、霜月祭りが途絶えた。

昭和三四年の伊勢湾台風では災害救助法が発動され、昭和三六年の伊那谷梅雨災害では大町地区の一一戸が流失し、当時県道であった地震ナギが決壊して影響は長引いた。昭和四〇年の台風被害は激甚災害として遠山中学校が流失倒壊、昭和通の家屋浸水多数であった。

最近では、平成二二年の七月の集中豪雨で、小道木の梅の久保で土石流が発生し二戸が埋まり、中郷のツベタ沢やその他の沢で土石流により道路が不通となり遠山地区が孤立した例などがある。

長い時間をかけて、治山工事が進み、山の緑は回復したが、最近では、収益性の悪さから間伐、山の手入れが出来ずに、木の根張が悪く表土の流出が危惧されている。

ナギの名称

地震ナギ、鉄砲ナギ、ミネキチナギ、オキクナギ、ヨシイチナギ、リンペイナギ、等がある、人名の付いているナギはその場所で、命を落とした事による。（飯田市南信濃）



ウラン、シダの類の植物、蝶の卵等、地元の人々があつて当たり前とそのままにしてきた動植物が持ち去られるケースが見られる。伐採された山肌は、豪雨にさらされると一気に土砂を押し流して濁流となつて氾濫を起こした。遠山の歴史は災害の歴史でもある。

遠江地震と遠山地変の関連伝承

和同七年（六一四）に起こつた遠江地震に起因する遠山地変と言われる池口地区の日蔭山の大規模な崩壊により、池口川、遠山川を塞ぎ止めての埋没林を作つた災害湖の出現、溜まつた水は今のカマスクボ辺りで東側に流れ出たので今の地形、もう数メートル高くなつて西側に流れ出すと全く状況は変わつていたと推測される。災害湖がどのくらいの期間にわたつて水を湛えていたかは専門の先生方にお任せして、湖を江と字をあてた江儀山、池原の地名が、水が流れ出た池口の名で総称されるようになっていて、その時に島と呼ばれる川に面した七つの地名が出現したと伝えられているが、大島西島、漆平島、上の嶋、尾の島、松島、月の島と推測される。

CS立体図は地表の情報が多方面に詳しく得られる地図であるが、蛇抜け沢などの様子、更には、地変の時に動いて乗つたままの不安定な地層があり、何時大規模な深層崩壊が起きるかもしれない危険な状況と言う。

遠山地震による地名の出現

享保三年（一七一八年）、遠山地震と呼ばれる和田の中心にそびえる盛平山の西側が崩落した災害では出山が出現し、数名の人命が犠牲

になつたと記録されている。今でも地元の人々は地震山と言う。その北寄りには地震ナギの地名が今でも残り、地形的に山が崩落した様子の分かるオチ「越」、遠山川対岸の「押出」崩落の後、沢筋の扇状地を形成、昭和二八年の災害では、沢が氾濫して二名の消防団員が殉職している。出山の出現による遠山川の流れの変化が地形、地名が関係するが、一夜にして出現したとされる「夜川瀬」については、諸説ある中なので今後の検討材料とさせて頂く。

河川の災害の関連「島」の地名

遠山の地には「島」のつく地名が多くあり、上村には、西ノ島、奥の島、上島、新（あたら）島、筆（ひつ）島、南信濃には柿の島、上島、阿島、大島、西島、漆平島、上の嶋、尾の島、松島、月の島、島古、飯島とある。

植物や果実に例えられる災害地名

欠けに繋がる柿の島、柿平、埋まりに繋がる梅平、梅のクボ、なし崩しにもろい地層を現す梨元、更に栗下、下栗、桜久保、胡桃久保、梶谷等があげられる。遠山谷の多くの集落は、崩落した緩斜面や低いながらも河岸段丘の上にある、尾棚「おだな」高平「たかつたいら」山原「やまはら」、とつばら「十原」も山が崩落した跡地に集落が形成されている。

遠山地域の近代の災害

明治以降の記録では、明治一八年、八日市場での崩落により部落埋没の人命被害。昭和一二年本谷川（遠山川）の湯ノ沢奥山土なぎの崩落で川を堰き止めてダム湖が出来、須澤集落の田

畑、人家の被害多し特に宇佐八幡社が被害を受け、神社を移転して霜月祭りを伝承してきたが、平成一〇年の須澤の地すべりで多くの人家の移転を余儀なくされ、霜月祭りが途絶えた。

昭和三四年の伊勢湾台風では災害救助法が発動され、昭和三六年の伊那谷梅雨災害では大町地区の一一戸が流失し、当時県道であった地震ナギが決壊して影響は長引いた。昭和四〇年の台風被害は激甚災害として遠山中学校が流失倒壊、昭和通の家屋浸水多数であった。

最近では、平成二二年の七月の集中豪雨で、小道木の梅の久保で土石流が発生し二戸が埋まり、中郷のツベタ沢やその他の沢で土石流により道路が不通となり遠山地区が孤立した例などがある。

長い時間をかけて、治山工事が進み、山の緑は回復したが、最近では、収益性の悪さから間伐、山の手入れが出来ずに、木の根張が悪く表土の流出が危惧されている。

ナギの名称

地震ナギ、鉄砲ナギ、ミネキチナギ、オキクナギ、ヨシイチナギ、リンペイナギ、等がある、人名の付いているナギはその場所で、命を落とした事による。（飯田市南信濃）



『暮らしの中で 伝えられている災害地名』

寺岡 義治

上郷地域の上段、下段と呼ばれる境の段丘崖は、「見晴断層」が高森町に続いているという。

この段丘崖には、「水ヶ洞」「ナギノ洞」「ドドメキ」などの災害地名があり、段丘崖下方の住宅地の中にも昔から「押出し」の災害地名が二ヶ所あり、三六災害の時には、JR飯田線の線路が諏訪神社下のトンネル両側で崩壊し、下方を通る県道沿い商店街付近に、大量の土砂が押出された。

「ドドメキ」地名も二ヶ所あり、その一ヶ所は座光寺に近く、リニア新幹線のトンネル通過予定地の上段付近で、「城山平」地名の堀跡に続き、現在は、段丘崖に水路が敷設され、降雨時の排水路となつて悪水を下段に落としている。

「水ヶ洞」は、近年になつて出店した大型店舗の西側で、上段の平地面に深く崩れ込んだ洞地形で、普段は一滴の水もなく、段丘崖の下には砂礫が小高く扇状地形を残し、扇状地の付近は新しい住宅地と化している。

「ナギノ洞」も往古は、大きな洞であつたが、段丘面との境付近、飯田線の掘割りが大きくカーブした付近が洞頭で、飯田線開設工事の残土を大量にこの洞に処理し、上部の大きな掘割りが、段丘からの悪水を防ぐ役目をしている。

もう一ヶ所の「ドドメキ」は、飯田高等学校グランド南西側の緩やかな洞地形にあつた。飯田中学校のプール建設の頃は、砂礫の桑畑が野底川まで続いており、洞地形の上部は高松通り付近で、二軒の住宅があり、一軒は坂道を少し下つた所で

写真屋をしていた。この付近は、段丘の高松原の水が集まる場所で、消防団記録に、昭和一五年六月一七日に、前記二軒の家が出水によつて危険となり、消防団が出勤したと記録されている。

三六災害の時には、高松病院西側の道路が川となつて、「ドドメキ」が谷川となり下流の道路が決壊し、近くに出来た二戸の住宅が危険となつた為、水防活動の応援要請があつた。

役場から現地に行く近道は、飯田高等学校のグランドを斜めに抜けて、「ドドメキ」につづく「茶ノ木畑」の地名の桑畑に入ると、畑はドボドボで膝まで入つてしまい、恐くなって桑の木に掴りながらやつとで脱け出した。「ドドメキ」地名の解釈は、水が流れる時の、どどめく（轟くの転化）ともいわれますが、私は樹木、木材等、防災工事による「災害地名」と考えている。

ここの「ドドメキ」に続く「茶ノ木畑」の急傾斜には、茶の木が植えられており、所有者は屋号を「茶ノ木」と呼んでいる。さらに「茶ノ木畑」に続く地名が「榎戸」で、この所有者の屋号は「榎戸」であり、この二軒は共に旧家で、この地名の土地には近年になるまで、他の住宅地はなかつたところである。

上段が田圃や畑だった頃は、普段の大雨位では、下段への影響は自然調整が可能であつたが、上空からの写真でご覧いただいたように、上段（特に桜畑地域）が全面宅地化された今、豪雨に対する警戒感を持つて、住んでいる地域の危険度を知つておく必要がある。

野底川に沿つた地域には、「中島」「天王原」「川底」「梅ヶ窪」「押出」「池の平」「大島」の地名があるが、下流域の「天王原」には、正徳五年の山

津波によつて、押し流されてきたと伝えられている、巨大な夜泣石が祀られている。

「川底」地域は、野底川に沿つた細長い地域で野底川の流路となつたことを物語る地形である。

中流域の「梅ヶ窪」は、野底山森林公園の一角で、公園造成工事の折、バックホーでの深堀で泥炭の堆積が現れ「埋ヶ窪」であることを知つた。

「大島」地籍は、風越山の北側で大きな崩れや、巨石の押し出された痕跡の残る谷で、平成一年の山抜けの現場付近での、埋もれ木の調査で、天延三年（九七五）の山抜けの崩れと重なっている事が解り、崩れ跡からの断層の露頭も松島先生に確認していただいた。

埋もれ木、埋没林の調査では、遠山郷の古老の方々に、数多くの地名のお話をお聞きした。

「名古山」は、昔は「ナギ山」だつたとお聞きし、米山老人の自宅裏の「水除け」の堤防に納得したものである。遠山川の埋もれ木出土状況で

「木沢」も「小道木」も災害地名と理解した。その他、「池口」「小池」「池原」「窪田」「蛇抜け」「蛇洞」「日陰山」等は、時間の都合で割愛してしまい、失礼な終わりとなりましたことを、お詫びいたします。

（飯田市上郷下黒田）



平成二六年度

定期総会・記念講演会の開催について

会長 原 董

謹啓 麗春の候、愈々御健勝のこととお慶び申し上げます。過日の地名シンポには八五名余のご来場を賜り充実した学びの会を催すことができましたこと厚く御礼を申し上げます。シンポ開催にあたりまして諸々ご支援ご協力を賜りましたご縁のある全ての方々に感謝を申し上げます。さて、左記により、新年度総会、及び記念講演会を開催致します。つきましては、諸々調整されまして御出席くださいますよう御通知申し上げます。謹白

記

日時 平成二六年五月二四日(土)

会場 飯田市美術館博物館 講堂

総会 午後一時―一時四十分

二五年度 事業報告・決算報告

二六年度 事業計画・予算案承認

講演 午後二時―三時三〇分(質疑含む)

備考 講師・演題は左記(時間は予定)

記念講演要旨

『難読地名の世界』

「信州」の魅力を探る

日本地名研究所所長 谷川彰英 先生

従来の難読地名の扱いは、ただその読み方を明かすものだけのものが多く、その由来まで探ったものは皆無であった。今、全国の難読地名の由来をずっと追っているが、その過程で「日本はまだまだ捨てたものではない」ことを痛感している。

難読地名の一つ一つをたどってゆくと、そこには古人の思いや知識、ユーモアなどが実に生き生きと反映されている。そこに昔の日本人の強烈な個性を感じ取ることができる。

難読地名といっても、単に名詞にもとづくものも多い。「馬酔木(あせび)」「倭文(しとおり)」「茗の木(ちしやのき)などである。信州でも「善知鳥峠」は知られる。

また、地形に関したものは「浮気(ふけ)」「半家(はげ)など、魅力は尽きない。もちろん歴史に深く関わったものも多い。「蔚山(うるさん)」「雑餉隈(ざっしよくのくま)」「国主(くにし)など枚挙にいとまがない。

数字にちなんだ地名も多い。私は松本に育ったのだが、安曇に「一日市場」という所があると聞いて、「人を売る市場」があるかと子供心に不思議に思ったことがある。また、私の集落の隣が「奈良尾」という集落だったが、なぜこんな山の中に奈良の都があるのかとずっと疑問を抱いていた。

読むことはできても、なぜその漢字を使うのかはわからないものが多い。信州では「諏訪(方)」「麻績」「燕岳」などである。

それらの説明を通して「信州」の魅力についてとことん語ってみたい。もちろん、参加者の皆さんからお教えいただきたい。

プロフィール

谷川彰英(たにかわ あきひで) 松本深志高・東京教育大・同院博士課程修了。筑波大学教授・大学理事・副学長を経て、名誉教授。九六年「柳田国男における教育思想形成と社会科教育論の展開」で教育学博士。地名研究・教育論・マンガ論など。ノンフィクション作家。一九四五年(松本市)。

お願い&連絡

□ 谷川先生の講演会へ一般聴講可・聴講無料

□ 知人友人に声掛けしお誘いの程お願いします。

□ 伊那谷研究団体協議会総会

日時 五月一〇日(土) 午後二時・予定

会場 飯田市美術館博物館 講堂

講演 『仏教考古学からみた下伊那の十王信仰』

講師 岡田 正彦 会員

□ 南信州文化財の会総会

日時 五月一八日(日) 午後二時「とりきん」

講演 『早稲田神社一括出土銭と甕について』

講師 市澤 英利氏(上郷考古博物館館長)

□ 日本地名研究所総会

日時 五月三一日(土) 午前九時三〇分

会場 川崎市高津市民会館 大ホール

※ 原董会長が研究発表(午後の研究会)

『地名が伝える伊那谷の歴史』

※ 谷川健一先生追悼集

『神は細部に宿り給う』 一〇〇〇円(込)

問合せ 原董会長へ

□ 地名コラム原稿の執筆をお願いします。

□ 会費納入のお願い(会計役員・後藤澄寿)

未納の方、至急納入をお願いします。新年度会費は五月一七日の総会の受付で納入願います。

問合せ連絡先 〇二六五(三三三) 三七六〇

伊那谷地名研究会事務局

シンポ原稿と写真を有難うございました。紙面編集の都合のため、若干の文体や表記など加除修正を致しましたことお許しください。
事務局 中島正昭 〇二六五(二四) 〇一三五
三九五(〇〇) 四 長野県飯田市上郷黒田一九七七
E-mail nakajimayaz@clock.ocn.ne.jp